

1800年前後のドイツ社会における 公共性・メディア・大学

ドイツにおいてテーマの3分野がおおよそ今日の姿でイメージされるようになったのは、200年から300年ほど前のことだといわれています。近代化が急速に進むなかで、社会制度全般に構造転換が起こりました。しかし、今日の姿とは？ 今、従来の制度は、グローバル社会とも、AI時代ともいわれる新しい状況のなかで、ふたたび自明性を失いつつあるようです。これからの姿を考えるうえで、原点を確認してみる必要がありそうです。

1 文芸的公共性

歴史家ラインハルト・コゼレクは、ドイツの社会用語が1750年から1850年の間に、どのような意味変化を起こしているのかを辿ることによって、ドイツ社会の近代化の過程を明らかにしました。

「公」(Publicum)は、1740年に発刊された『ツェドラー百科事典』によれば、「本来、領主ないしは高官の管轄にあるもの」を意味するのであって、「たんなる私人の管轄にあるもの」はそれにあたらないとされています(Grundbegriff, 4, 430)。18世紀ドイツは300以上の領邦に分裂していました。その中で着々と勢力を拡大していたのは、ベルリンを中心とするプロイセンで、1740年には、「大王」と称されるフリードリヒ2世が即位しています。絶対王政の下で、権力は「領主」、「高官」に集中し、「たんなる私人」(市民)には政治的権利はなかったのです。

しかし、「公」はいつも国家権力に重ねられていたわけではありません。1716年、リュウニヒは「自著を公衆(Publicum)のために出版した」と書いています(Grundbegriff, 4, 431)。リュウニヒの「公衆」は読者です。教養ある読者層の多くは、市民でした。18世紀になるとドイツでも、演奏会、展覧会、劇場が「公開」されるようになります。1729年、バッハは毎週金曜日に、ライプチヒのコーヒー・ハウスでコンサートをしていました。お金を払えば誰もが、芸術を体験することができるようになったのです。話題が芸術ということになると、誰もが身分に関わりなく、「私人」として意見を交換することができました。1773年、ヴィーラントは雑誌『メルクール』を創刊するにあたって、以下のように宣言しています(Grundbegriff, 4, 431)。

知識のある者一人一人、あるいは、彼らの集まりは、それぞれ一票をもっているにすぎない。名もない人であっても、アカデミーの総裁と同等の一票を持っている。

ハーバーマスは、芸術、学問をめぐる自由な議論の場を「文芸的公共性」と呼び、「政治的公共性」形成へ向けての一段階として位置付けました(ハーバーマス 50)。1784年、カントが「好きなだけ、何事についても議論せよ、ただし服従せよ」というモットーを掲げ、「フリードリヒ大王の世紀」を「啓蒙されつつある時代」とみなしたのも、「私人」としての議論に市民社会の発展を期待したからでした(カント 22ff)。

2 『一般ドイツ文庫』

ベルリンの人口は15万人程度だったと言われています(ブルジョア 366)。ロンドン、パリといった都市のなかったドイツでは、知識人のサークルが各地に点在していました。それだけに、新聞、雑誌、書籍が、意見交換の場として重要な役割を果たすこととなります。1765年、ベルリンの啓蒙主義者フリードリヒ・ニコライによって創刊された『一般ドイツ文庫』は、1793年までに117巻、さらに、『新一般ドイツ文庫』として、1805年までに、104巻を数えました。期間中に出版された主な書籍の書評のほか、神学から、数学、経済に至る分野別の短信が掲載されています。第1巻序文には、この雑誌の発刊の意義として、「書店すらない小さな町」にいる「新しい文学の愛好家」に新刊情報を提供することが挙げられています。また、新刊を「一枚の絵のように」通覧できる点も優れたところだとしています。書評者は、各分野の専門家でした。『一般ドイツ文庫』は、いわば、四半期ごとに更新される百科事典でした。

さらに、『一般ドイツ文庫』は、議論の調整弁ともいえるべき役割も担っていました。1769年、神学者ヨハン・カスパー・ラファーターとの論争が起こると、哲学者モーゼス・メンデルスゾーンは、ユダヤ人であるがゆえに、さまざまな誹謗中傷にさらされました。教養ある市民からなる「文芸的公共性」もまた、偏見からまったく自由だったわけではないのです。ベルリンの牧師で、ニコライとも親交のあったリュトケは、ラファーターに宛てたかなり長い手紙で次のように書いています。

キリスト教世界も、ユダヤ教世界もまだ十分に準備しているようには思えない議論に火が付くことを危惧しています。

(Mendelssohn 7, 312)

メンデルスゾーンの友人だったニコライは、両者の仲裁に向けて動きます。『一般ドイツ文庫』における関連記事は、事態の收拾をはかる方向で編集されました。書評は、市民社会における意見交換が本来どうあるべきかを示していました。

3 大学の使命

大学も、18世紀に転換点を迎えます。シェルスキーによれば、1792年当時、ドイツ語圏には42校の大学がありました。そのうち半数以上が、1818年までに閉鎖されています(シェルスキー 26)。1810年、ベルリン大学が建てられたのは、このような危機的状況下においてでした。大学創設を指揮したのは、ヴィルヘルム・フンボルトです。フンボルトは、「孤独と自由」こそ、大学組織の原則であると書き残しています。

高等学術機関と呼ばれるものは、いかなる形でも国家から自由である。それは、外的な余裕、内的な努力によって学術探究へ駆りたてられる人びとの精神的な生活以外のなにものでもない。

国家権力から大学を守るという意味では、フンボルトに先見の明があったと言えきかもしれません。1819年、カールスバート決議によって、ドイツ社会は厳しい検閲下におかれしました。もし、フンボルト構想が実現していれば、大学は国家から独立した独自の言論空間を形成することになったかもしれません。しかし、この覚え書きを読むかぎり、フンボルトが、大学に社会的な役割を期待していたようには思われません。

啓蒙の理念を引き継ぎ、大学の社会的使命を訴えたのは、選挙によってベルリン大学学長となるヨハン・ゴットリーブ・フィヒテでした。

われわれのアカデミーは、それ自体として見ると、われわれによって述べられた形で、完成した国家のイメージを提供している。諸力がお互いにしっかりかみ合い、有機的な統一と完全性へと溶け合って、共同の目的を促進することが、それである。

(Fichte, 8, 202)

フィヒテは、理想の社会は、あらゆる共同体に先立って、大学において実現されると考えました。そして、大学において理想の社会を実現することが、社会全体の理想、すなわち、「共和国」、「共和国連合」の達成に向けての第一歩になるはずだということです。フィヒテはここで、「政治的公共性」の前段階としての「文芸的公共性」という理念を、大学創設プランという具体的な枠組みのなかで更新しています。知識人の集まりとしての大学組織は、理想的共同体として、規範的な役割を果たすことが求められているのです。

本研究はJSPS科研費18K00450の助成を受けたものである。

参考文献:
 ■イマヌエル・カント(中山元訳)『永遠平和のために 啓蒙とは何か 他三編』光文社古典新訳文庫 2006 ■ヘルムート・シェルスキー(田中昭徳ほか訳)『大学の孤独と自由 ドイツの大学ならびにその改革の理念と形態』未来社 1970 ■ユルゲン・ハーバーマス(細谷貞雄、山田正行訳)『公共性の構造転換 市民社会の一カテゴリーについての探究』第2版 未来社 1994 ■W. H. フリュフォード(上西川原章訳)『一八世紀のドイツ ケーテ時代の社会的背景』三修社 1974 ■Johann Gottlieb Fichte's sämtliche Werke, hg. v. Immanuel Hermann Fichte, Berlin 1971 ■Moses Mendelssohn, Gesammelte Schriften, Jubiläumsausgabe, hg. v. Alexander Altmann u. a. Stuttgart 1972ff. ■Geschichtliche Grundbegriffe. Historisches Lexikon zur politisch-sozialen Sprache in Deutschland, hg. v. Reinhart Koselleck u. a. 8Bde. Stuttgart 1972-1997
 ■Wilhelm von Humboldt: Über die innere und äussere Organisation der höheren wissenschaftlichen Anstalten in Berlin (1809/10): https://www.hu-berlin.de/de/ueberblick/geschichte/abriss/hubdt_html#idee
 ■Allgemeine deutsche Bibliothek: <http://ds.ub.uni-bielefeld.de/viewer/toc/2002572/0/>